紡績工場の正門

34　森村橋

もりむらばし

静岡県東部の山あいの町、小山は、綿糸生産の町である。鮎沢川沿いの狭い谷間に、富士紡績株式会社小山工場とその関連施設が展開している。この工場は富士山の雪解け水を集めて流れる鮎沢川の豊かな水力（当初は水車動力、のち電力）に依存して明治29年（1896）に創業したもので、100年近い歴史がある。

この地に鉄道が開通したのは、明治22年（1889）２月１日のことで、東海道線の国府津－静岡間が開業したのである。同年７月１日には東海道線新橋－神戸間が全通した。当時は、現在の御殿場線が東海道線であり、熱海・丹那トンネル経由の現在の東海道本線が開通し、旧線が御殿場線と改称されるのは昭和９年（1934）12月１日のことである。

さて本題の橋は、かつての東海道線小山駅（現御殿場線駿河小山駅）から、鮎沢川の対岸にある工場に通じるトラス橋であって、創業から10年後の明治39年（1906）に完成した。

当初は、橋の中央に軌道が敷設され、トラスの外側に歩道がついていた。

また、工場の正門にある橋であるから、それにふさわしい意匠が整えられていた。いまではほとんど失われてしまったが、橋門構上部の橋名板、家紋の透かし模様、街灯などが付属しており、橋詰の柵も相応のものであった。

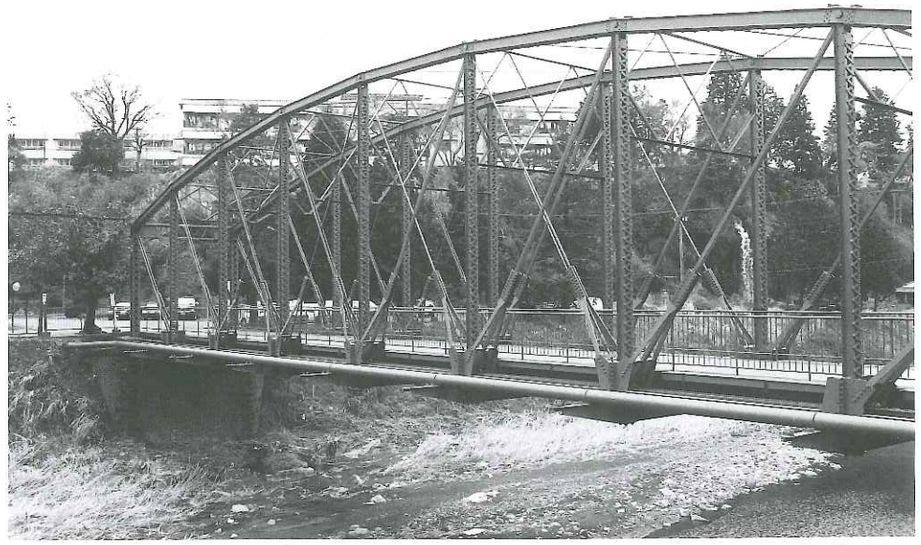
橋名は、富士紡績の創業に関わった人物の一人、森村市左衛門に由来している。会社にとっては、創業時代の由緒ある橋であるから、近年実施された修理も、外観を大きく変えることなく、苦心の補修・補強が施され、大切に扱われている。

さて、このトラス橋であるが、構造的にはアメリカ流のピン結合プラットトラスで、引っ張り力が作用する下弦材や斜材にはアイバーが使われている。端柱は鉛直で、上弦材は放物線（折れ線であるが）を描いている。路面を支える床組みが下弦材よりも下に吊り下げられている構造も特徴の一つである。また、形鋼に BURBACH などの浮彫り文字が読み取れるので、材料は、ドイツのメーカーから輸入されたものであることがわかる。

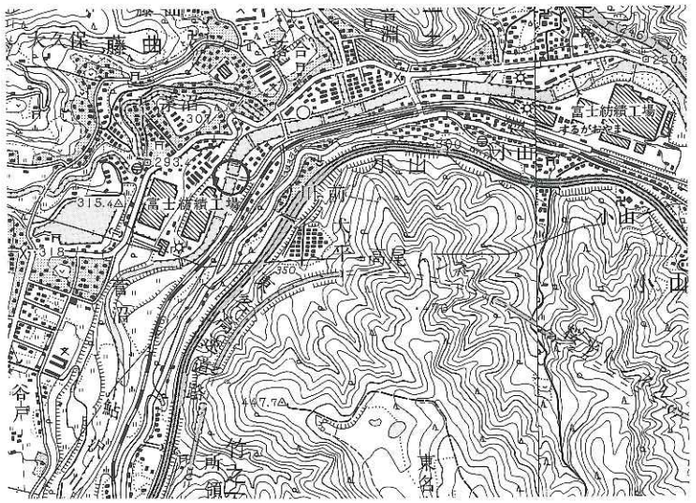
なお、上述の修理は下弦材と斜材とそれらの結合点（格点）あたりに集中しており、実質的にピン結合から剛結合へと補強されている。

橋には２種類の銘板が取り付けられている。いずれも縦書きであるが、１枚には「東京石川島造船所　明治三十九年製作」、もう１枚には「設計者　秋元繁松」とある。初めの１枚は、銘板に必ず表示する事柄であるが、後の１枚の設計者を表示した例はわが国ではまれで、大変めずらしい事例といえよう。なお、秋元繁松は京都帝国大学土木工学科を明治36年に卒業した人である。　〔ＫＪ〕

開通年月：明治39年（1906）11月
所在地：静岡県小山町
河川名：鮎沢川
橋長・幅員：約40ｍ×4.877ｍ（主構中心間距離）
径間数・支間長：1×39.0ｍ
形　式：下路曲弦プラットトラス（ピン結合）



〈1991年３月，撮影・共に小西純一〉



（1:25,000　駿河小山，山北）